

- 1 派遣期日 令和元年6月29日(土)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 千葉大学教育学部附属小学校
所在地 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
<http://www.el.chiba-u.jp/>

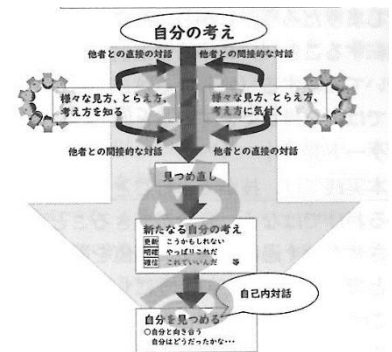
3 研修内容

(1) 視察校における研究への取組

研究のテーマ: 自分の考えを深める道德教育～多面的な思考を引き出す対話を通して～

千葉大学附属小学校道德部では、児童が自分の考えを持ち、その考えを明確にしたり、発展させていったりすることのできる道德授業の研究を重ねている。児童が生きていくこれからの社会は、予測不可能な変化が起こるといわれている。その際、周囲と協働し、知恵を出し合って乗り越えていく力が必要であり、自分にとっての「最適解」「納得解」を見出していく力が求められる。そのため、「自分の考えを深める」ことが今後の道德科においてはより一層重要であると考え、「考えを深める道德授業」を研究主題として設定している。基本構想は以下の通りである。

＜対話による自分の考えの深まり方の課程＞



① 考えを深め合う道德授業とは

児童が思ったことや感じとったことを伝え、聞き、問うことを通して、道德的価値について以下のようにとらえることとする。

- ① 様々な見方やとらえ方、考え方等を知ること
- ② 新たな見方やとらえ方、考え方等に気づくこと

② 多面的な思考とは

出典 千葉大学教育学部附属小学校『研究紀要第52号』(2019) pp.117

多面的な思考には、事象への見方のみならず、とらえ方、考え方また、感じ方等の要素が含まれている。また、ここでいう様々な考え方等を出し合うことは、多様な考えにふれることともいえる。それにより、自分の考えとの違いから、「なぜ」「本当にそうなのだろうか」という疑問が生じる。このような問いは、話合いをより「問題意識」のあるものにし、児童が道德的な問題をより「自分事」としてとらえることにつながる。多様な思考を促すことが、考えを深め合う道德授業の土台になるといえる。

③ 対話とは

「対話」とは、お互いの考えや情報の共有のための話合いの意味が含まれる。本研究での話合いの意図は、多面的な思考を生かし、様々な考えを知ることである。他者の考えに耳を傾け、意見交流によって考えを深めていくことをねらいとしている。つまり、目指している話合いは「対話」なのである。自分と異なる考えや考えつかなかった考えにふれ、考えの選択肢をより豊富にできる対話を行う。

④ 多面的な思考を生かした対話するための手立て

役割演技における登場人物の心の変容の場面を取りあげ、演者が選択した判断の根拠や心情を表情やしぐさなどから想像したり、問い返すことで確かめたりする。さらに、効果的な役割演技の活用につなげるために、対話がどうなされたのか、どのような思考を児童がするのか、対話をもとに考えを深め合ったのかという点について低・中・高学年の各段階での特性を児童の対話から考察していく。

(2) 視察校における授業の実際

① 第2学年 道徳科

- 主題名 大切なわたし 大切なみんな
- 教材名 「小さい“つ”が消えた日」(三修社 改作)
- 本時のねらい

自分のよさや友達のよさに気づき、公平な態度で人と関わろうとする心情を育む

○ 授業の実際

小さい“つ”が、「音が無いから文字ではない」と笑われて家出をしたことで、言葉が成立しなくなり混乱が起きるが、彼自身も他の文字も彼のよさに気づき、他の文字が彼を呼び戻し、村で迎えるという内容である。本時は、教材後半を読み、話し合う段階の授業であった。授業の初めに、前時に書いた感想を交流し、教材内容と自分の考えを見返す時間が取られた。

その後教材前半を基に、「まわりの文字たちが小さい“つ”のことを笑ったのはなぜか」「そのときの小さい“つ”の気持ち」について話し合いが行われた。指導者は出てきた考えを名前と共に板書したり、発言した児童の考えに付け足しがないかを他の児童に確認したりしていた。次に教材後半を読み、戻ってきた小さい“つ”を他の文字たちが迎える場面の役割演技を行い、話し合いを進めた。これまでの話し合いでの反応や、前時のノートをもとに演者を選んでいった。指導者は演技後の話し合いで、新たな見方や考え方等に気付けるように発問・指名・問い返しを行っていた。最後に授業で学んだことや考えたことを記入し、授業が終了した。

② 第6学年 道徳科

- 主題名 友達だから～友達とは、友情とは～
- 教材名 「ロレンゾの友達」(光村図書)
- 本時のねらい

友達を思うという友情の根底にある気持ちを理解し、友達とのよりよい関係を築いていこうとする心情を育む。

○ 授業の実際

罪を犯したとされる友人・ロレンゾが自分達に会いに来ると知った時の3人の友達について描かれた教材である。本時は、対話を重ねていく中で、方法は異なれども3人ともロレンゾを思って考えていたという「友情」の本質に気付かせていくという内容の授業であった。対話の時間を確保するために、教材を事前に読ませている。

授業の初めに、友達とはどんな人のことをいうのかについての考えを確認していた。次に、3人のうち自分は誰の考えを支持するか、それはどうしてかの話し合いを行っていた。たくさんの意見が出され、登場人物に自分を重ねて友達について考えていた。酒場で本当のことをロレンゾに言えなかった3人の気持ちについても話し合いが行われた。指導者は、児童の考えを別の言葉で言い換えて確認をしたり、質問をしたりして考えを板書していた。

役割演技では、翌日再び会った4人についての場面を想定して行い、それを基にした話し合いが行われた。演技者は前方に座り、児童が演技者の行動を振り返り、質問をしていた。児童の考えを深めるための問いかけを指導者が行い、「友達のことを考えているのは誰も共通している」とまとめていた。最後に授業を通して友達について考えたことを近くの人と話し、発表を行い、授業が終了した。

4 感想

- 低学年の段階から話し合いの仕方が身についていると感じた。発表者の方に体を向け、目を見て聞くことができていた。また、教師は児童の目線に合わせてしゃがんで話を聞いていた。話し合いにおいて、児童が話しやすい環境を設定することの大切さを感じた。
- 高学年においては、児童主導で対話がなされていた。教師の高学年における役割は、児童の発言を確認したり、整理したりしたものがほとんどであった。役割演技では、高学年ほどより様々な点に目が向いたり、互いの経験を元に話し合えたりすることから高学年においてより有効な手法であることが分かった。低学年だけでなく、高学年にも役割演技を活用した学習展開を参考にし、考えを深め合う道徳授業の指導に生かしていきたい。